

# 国際漁業学会 (JIFRS) 短信

<http://www.jifrs.info/>

事務局 〒631-8505 奈良市中町 3327-204 近畿大学農学部内

Tel : 0742-43-6021 Fax : 074243-6021 E-mail: mariji@nara.kindai.ac.jp

郵便振替番号 : 00100-6-26448 国際漁業研究会

三菱東京UFJ銀行富雄(トミオ)出張所 普通口座 3698979 国際漁業研究会

2012年度第1号

2012年4月6日刊

## 目次

- |   |       |
|---|-------|
| 1. 会長あいさつ「未来の大学」                        | 多田 稔  |
| 2. 事務局より(大会情報等)                         | 多田 稔  |
| 3. 学会賞選考委員会よりお知らせ<br>ー学会賞(国内賞)候補者の推薦依頼ー | 山下 東子 |
| 4. カナダからの手紙                             | 阪井裕太郎 |

## 1. 「未来の大学」

多田 稔(国際漁業学会会長・近畿大学)

大卒の就職率が7割とされています。これを7割に低下したのだとみると、企業組織のフラット化や海外移転によって中間管理職の需要が減少したと考えられます。反対に7割もあるとみると、大卒が高卒等との差別化困難な一般労働力として需要されていると考えられます。

このような大学教育と社会的ニーズのミスマッチを直視せず、大学では授業コマ数の増大や授業への出欠重視という授業時間投入の量的拡大が図られています。これによって、多くの学生は、学問ベースの理解できない授業、あるいは反対に精神活動を要しない優しい授業にますます拘束され、社会から隔離された状態で飼育されるようになりました。さらに、本来は Faculty Development という意味の FD 活動が幼児化教育を推進して学生の社会適応をますます困難にしています。ここでは、「学生同士に磨き合う関係があるのか」、「学生がなぜ勉強しないのか、勉強すればどうなるのか」が問われることはありません。一方、国際競争に直面する産業分野では、力量の高い修士や博士のニーズが高まり、大学院教育の学生数は揃っているものの、質の向上が急務となっています。

大学学部はキャッチアップの発展段階では、海外で開発された技術を工場に持ってくる模倣技術者や課長型サラリーマンを供給するという重要な機能を果たしてきましたが、労働需要の二極分化に対して、従来の学部の役割は終了したものと思われれます。それでは大学をどう変えるか。私は、学部の卒業定員を大幅に削減し、理論ではなく術や技に基礎を置いた職

業専門教育部門、キッズニアを社会入門風にしたもの、を拡充すべきだと考えています。そこを終了すると、地域の〇〇屋さんとして働くことになり、社奴として酷使されることもなく、国際競争からはじかれるだけでもなく、健全な地域社会を形成するという役割を果たすとともに、社会保障費の膨張に歯止めをかけることにもなります。

我が国は、黒船ショックを契機に和魂洋才で外国の科学技術を取り入れ、日露戦争の薄氷を踏む勝利によって一等国の末席を占めましたが、外交を誤り敗戦に至りました。焼け野が原の中で、アメリカの物量に敗れたことに大いに学び、キャッチアップの最終段階で **Japan as No.1** の座を短期間仕留めたものの、戦争遂行のソフトウェアにも敗れていたことを忘れたため、経済力を外交戦略に有効に活用する方策や創造立国に向けた国内体制への転換を見いだせないまま、バブル崩壊から立ち直れなくなりました。

もはや坂の上の雲を追う時代は終わり、美しい落日を迎えるべきとの見解もあります。しかし、我が国を取り巻くアジアの状況は、アメリカの国力が後退しようとする一方で、野心的な新興国の台頭という、かつて欧州で見られた展開となっています。したがって、社会保障と安全保障を賄う税金を確保するためにも、国際競争力を持つ一定の産業規模が必要となり、それを担う人材の育成や獲得が必要になります。絶頂期を過ぎたローマ帝国は辺境からの人材登用によって時折輝きを取り戻し、国力の限界を超えて海外に介入したアメリカ帝国は、斜陽オーストリアにおけるメッテルニッヒと同様の役割を担うキッシンジャーの名人芸外交によって戦線の縮小を図り、シリコンバレーの興隆とあいまって、一極覇権に向けた礎を築きました（その後、ブッシュのイラク・アフガン戦争でその遺産を食い潰しました）。領域支配を伴わない日本においては、このやり方をさらに積極的に展開する必要があります。

国の研究機関が弱体化する中で、大学の役割はそこに求められます。ところが、大学も、学生の量的確保を目的としたエンターテイメント性の強調と、全出を良しとする風潮の下で、大学教員を論文数等の業績によって選考しているにもかかわらずそれを必要としない教育を求め、論文数がノルマ化されることによって、少ない研究時間が貧困な内容の論文作成競争に費消されるというように劣化しています。これでは、秋入学にしたところで海外から優秀な学生はやってきませんし、目的意識のある日本人学生は海外を目指します。アメリカでは、難民同様に渡ってきた者でも能力次第で国務長官やインテル会長になれるのです。

ドラッカーの「イノベーションと企業家精神」によると、現代の大学の原型はフンボルトが創設したベルリン大学であり、それをアメリカの大学が上手く継承したようです。今日では、MBAを取得して企業経営者となるにしても科学技術への広い知見は必要であり、また、研究に携わる場合にも市場性を見極めを求められます。そこで、大学も入学当初から学部や学科で細かく仕切られたものではなく、横断的課題指向のグループ内で学生が多様な専門性や社会経験を持った人材から刺激を与えられる環境を作らねばなりません。教員同士が顔を合わせると雑用の話をするのではなくアイデアの交換が起きる、アップルやグーグルの紹介ビデオに出てくるような組織像への転換と、収益源の知財へのシフトが求められます。

企業の本社と研究開発以外の部門が海外に進出し、本社の下手な経営で企業がつぶれていく時代です。大学卒業と同時に徒手空拳で一つの企業や官庁に属して忠勤に励むという、幕

藩体制下でのサムライと藩の関係のような生き方モデルの転換が迫られます。技や術によって健全な地域社会を構成する遺伝子と、創造力によって国際競争に立ち向かう遺伝子を育成し、これから直面する高齢化や不安定化する国際環境を切り抜けた上で、日本民族の次の開花期を待つという戦略が得策であると考えます。（3回連載終了）

## 2. 事務局より

多田 稔（近畿大学）

2012年3月25日に行われた理事会において、以下のことが決定されましたので、事務局より報告いたします。

### （1）次期大会について

今年度の大会を、8月4-5日(土曜・日曜)に、東京大学農学部にて行うことを決定いたしました。4日午後がシンポジウム「再生可能エネルギーと水産業（仮）」、4日午前、5日（いずれかもしくは両方）が個別報告となる予定です。なお、要旨集等は配布いたしませんので、【要旨等は、各自で事前にホームページからダウンロードをお願いいたします】。（7月20日頃に掲載いたします。）シンポジウムの内容、その他の詳細につきましては、5月中を目途に、改めて発表させていただきます。

個別報告は、1報告あたり25分（質疑含む）の予定です。報告希望者は、報告者の氏名、所属、および報告タイトルを、国際漁業学会事務局（近畿大学）有路昌彦までメールにてご連絡下さい（[mariji@nara.kindai.ac.jp](mailto:mariji@nara.kindai.ac.jp)、◎は@に変えて下さい）。【締め切りは、6月15日といたします】。また、報告者には、7月15日までに報告要旨（40字×25行以内）を、7月28日までに当日の報告資料（当日までに改変可）を、それぞれ提出していただきます（事前に座長に渡します）。

なお、「個別報告の内容は、原則として未発表の研究成果とするが、直近に発行された本学会誌（和文・英文各誌）に掲載された（学会で未発表の）ものについては、この限りではない」ものといたします。

### （2）その他検討事項

日本学術会議による類似学会の統合化構想への対応や、台湾農経学会（REST）の荘先生から提案のあった日本、韓国、台湾で持ち回りの形式で漁業経済学系の合同学会を開催することについて、今後検討を進めることとなりました。

今まで JIFRS 事務局を担当されてきた原田幸子さんがご結婚、松井隆宏さんが三重大学大学院にご栄転のため事務局を去ることになりました。長い間、大変お世話になりました。今後は東京大学農学部内に新たな事務局支部を設け、近大事務局と分業することとなりました。今後ともよろしくお願ひします。

### 3. 学会賞選考委員会よりお知らせ

#### —学会賞（国内賞）候補者の推薦依頼—

山下東子（学会賞選考委員長・明海大学）

2012年度の学会賞候補者の選考を開始します。選考要領は下記の通りです。自薦・他薦を受け付けますので積極的に推薦してください。なお、選考委員会では並行的にIIFET2012においてJIFRSが授与するYAMAMOTO Prize2名の選考も進めています。こちらはIIFET事務局に審査用ペーパーを提出して自ら応募した途上国出身者が対象ですので推薦はお願いしておりません。賞の種類：国内賞は以下の3種類です。

<功績賞>学会の活動に対して大きな貢献のあった会員。

<学会賞>書籍、もしくは一連のまとまった研究を通して、学術の発展に大きく寄与した会員。

<奨励賞>おおむね40歳以下で、本学会誌に掲載された論文、もしくはそれを含む一連の研究を通して、学術の発展に寄与した会員。

対象期間：今回に限り過去3年間です。2009年1月以降の業績を目安にしてください。

本学会誌（和文・英文）は第8巻～10巻掲載論文が対象となります。

募集期間：2012年5月31日（木）締め切り

推薦方法：推薦する賞のジャンルとその理由（形式自由）をJIFRS会長（多田稔 tadacom@nifty.com）あて、Eメールにて送付してください。

選考方法：会長が学会賞選考委員会に諮って候補者を決め、理事会の承認を得て決定します。

賞の授与：2012年度国際漁業学会大会の際に行う総会にて授与します。受賞候補者には事前にお知らせしますので、ぜひ大会へのご出席をお願いします。

### 4. カナダからの手紙

阪井裕太郎（カルガリー大学経済学部博士課程）

1978年にリリースされた平尾昌晃・畑中葉子の『カナダからの手紙』をご存じだろうか。恋人から離れてカナダで一人旅をしている寂しさを歌った名曲である。カナダで留学中の私にとって、この曲の歌詞には非常に共感できるものがある。それは、私にとっての恋人、「日本の水産」から少し離れてしまっている寂しさである。

私は昨年まで東京大学大学院農学生命科学研究科の博士課程に在籍しており、漁業管理・魚価形成などに関する研究を行っていた。博士研究は悪くないペースで進んでおり、留学は博士を取得した後という選択肢もあったが、幾分迷った末に留学に踏み切った。当初の計画では、こちらでトレーニングを受けつつ同時に研究も進め、論文をコンスタントに投稿したいと考えていた。しかし、その計画が如何に甘かったかは すぐに明らかとなる。

北米の経済学部博士課程は、一般に5年間のコースである。最初の2年間はコースワークとなっており、1年目にミクロ経済学・マクロ経済学・計量経済学、2年目に専門分野の基礎を徹底的にたたきこまれる。3年目から各々の研究を始め、平均3年かけて博士論文を書き上げる。研究を始める前に、研究に必要なツールのパッケージを与えるというある種合理的なシステムである。私はあと2カ月で1年目を終えるという段階にあるが、このコースワークの厳しさは想像を絶するといっても過言ではない。大量の宿題が2週間ごとに出され、中間試験が4週間ごとに行われる。個人でこなすには自ずと限界があり、**study team**を組んで日々ディスカッションをする。英語ができなければ確実に生き残れないという環境下で、嫌でもある程度喋れるようになる。それでも、最終的な成績が一定基準に満たなければそこで**kick out**となる。残念ながら、私も1学期目でクラスメートを2人失った。このような状態であるから、コースワークをしながら研究を進めるという当初の計画はわずか数日で修正を余儀なくされた。ネットで水産関係の情報をチェックし、宿題の合間に論文に目を通すのが精一杯である。恋人との距離を保つのはなかなか難しい。

加えて水産から離れる要因になるのが食事である。カルガリーでは魚はあまりポピュラーではない。最もメジャーなスーパーである**Safeway**に買い物に行くと、魚介類コーナーはごく小さく、商品構成はsalmonが8割、haddockとrockfishで2割といったところだ。カナダ人の友人宅にディナーに招かれた際に、今夜は魚料理だというので、どの魚ですかと聞いたところ、質問の意味を理解されなかったことがある。彼らにとってfishと言えばSalmonを指すのであり、どのfishかという質問は意味をなさないのであった。もっとも、寿司には一定程度の人気があるようで、何度か行った回転寿司は毎回満員に近かった。切り身では買わないが寿司は食べるという傾向は、何も日本に限ったことではない。

さて、2年間のコースワークを無事終わられるものとして、その後に内陸都市のカルガリーで水産系の研究ができるのかという疑問の趣もあるだろう。意外なことに、カルガリー大学には、**Daniel V. Gordon**教授および**John Boyce**教授という漁業経済分野で著名な教授が二人所属している。**Gordon**教授は実証研究が専門であり、ノルウェーやデンマークを中心とする北欧の漁業経済学者グループとの強力なネットワークをもつ。一方の**Boyce**教授は理論研究が専門であり、**UCDavis**の**James Wilen**教授を中心とする北米の漁業経済学者グループの一員である。従って、立地条件のマイナスを差し引いて考えても、カルガリー大学は漁業経済学を学ぶのにそう悪い選択肢ではない。コースワークを早々に終わらせて、この二人の指導のもとで理論・実証両面での研究能力を磨くことが今後の計画である。一時的に日本の水産から遠ざかってしまっている現状は残念だが、少し遠回りをしてでも実力をつけて、いずれ日本の水産復興の一助となればと考えている。想いだけではなく実力を伴ってこそ、恋人との仲はうまくいくものではないだろうか。